

田園風景と無農薬栽培に魅せられて...

私たちが鳩山に移住を決めた理由



「鳩山町で見た夕日の景色にほれた」と、熱っぽく移住の決め手を教えてくれた、三鷹市在住の安達さんご一家。新しい家が建ち、転居してくるのが待ち遠しい様子でした。

Case 1

安達さん
(東京都三鷹市から移住予定)の場合

元々無農薬野菜の栽培に興味があり、任意団体「元氣パートナーズ倶楽部」(奥田)のホームページで野菜も購入していたという安達さんご夫婦。移住の契機となったのは、昨年6月、当団体主催の「田植え体験」で、鳩山町を訪れたときでした。主催団体の代表 吉澤真由美さん(奥田)の案内で、偶然近くの空き家を見る機会が一目ぼれ。その後、吉澤さん

の紹介で家建てる土地も確保でき、とんとん拍子で移住が現実のものとなりました。東京から鳩山町という地方に移住を決めた妻・洋子さんは言います。「東京は、家賃が高く、子どもも預けられず、住みにくいと感じていました。本当の『豊かさ』っ

て何かなってずっと疑問を抱いていました。自分たちの親が都会に憧れていたように、私たちの世代は、逆に地方に憧れているのです。」そんな洋子さんは、鳩山に住み始めたら、お子さんへの食育に取り組み、地元の食材を使ったカフェも経営したいそうです。

地方が持つ『豊かさ』子育て向き環境への憧れ

無農薬栽培に以前から興味を持っていた夫の将さん。都内にある会社まで通勤時間が増えることになりませんが、「鳩山からなら十分に通勤圏内ですし、何より、自分のやりたい無農薬栽培ができて、自然豊かな環境で子育てができる

ことが魅力です」と語ります。インターネット環境と人の繋がりを活かせば、どこにいても物は売れる時代、とも安達さんご夫婦は言います。安達さん一家の「夢の新生活」開始は、来年の春頃になる予定です。

Case 2

岡崎さん
(春日部市から2年半前に移住)の場合

子育てを終え、これから

の人生で何かを始めたいと考えていた妻の宏子さんは、食の安全性に関心が高く、無農薬野菜を推奨する前述の任意団体の活動に共感し、鳩山町に通う生活を続けていました。

初めは、春日部市の住宅で楽しんでいた家庭菜園をもう少し広げて、「自分たちが食べられる程度の野菜などを栽培したい」という気持ちでした。そんな折、遠方まで見通せる、景色の良い場所に家を建てられる話が舞い込みます。

「条件の良い話がタイミングよく入ってきた」と移住の決め手を振り返る岡崎さんご夫婦が、春日部市から鳩山町奥田地区内に越してきたのは平成25年1月。それから約2年半が経過した今でも、

景観の良さ、人の温かみ 都市にはない贅沢空間

お二人がほれ込んでいた「美しい景観と自然豊かな環境、そして周りの方々の温かさ」が、移住を決めた大きな理由の一つだと言います。「鳩山に来た際にまず驚い

たことは、鳥の音がきれいなこと、夜に見えた星空の美しさ、そして皆さんがあいさつをしてくれたことです」と、宏子さんは興奮気味に当時を振り返ってくれました。

また、北本市まで通勤する夫の真一さんは、お気に入り環境で過ごす日々の生活を、「贅沢な時間で、毎日が旅行気分です。だから、休日は旅行をしに出かけません」と笑いながら話します。

今の環境を与えてくれた地域や人々に、感謝しているお二人。今後は、地域の行事への積極的な参加など、自分たちがほれ込んだ環境を存続させていく活動に、できる限り協力していきたいそうです。



今回ご紹介した二組のご家族に出会った「田植え体験」(6月14日、奥田地区にて。主催：元氣パートナーズ倶楽部)。岡崎さんも運営を手伝いました。

「地元の方には当たり前な環境が、私たちにとっては格別なんです」と幸せそうな様子の岡崎さんご夫婦。無農薬栽培を多くの人に広める目標に向かって日々奮闘中です。

試される地域の「受容力」～取材を終えて～

鳩山町が持つ、のどかな雰囲気と友好的な人々の魅力にひかれ、実際に移住を決めた方々がいます。今回ご紹介した内容は、任意団体の活動が「移住」という新たな人の流れを生み出した点で、北部地域活性化の先駆的な取り組みと捉えることができます。それは、人口減少や農業集落機能の維持という大きな問題に、行政主導ではない形で挑戦している事例でもあります。

町外からの転入者が増えることは、これまでの取材先で多く聞かれた、「担い手の高齢化」と「後継者(新たな担い手)不足」という問題の解決にも有効です。彼らは、移住先への地域「愛」が、想像以上に大きいからです。しかし同時に、受け入れる側の力も試されます。

移住を後押しするためには、町がその仕組みを作ることも必要ですが、転入者を受け入れる地域の「受容力」も、今後ますます重要となるのかもしれない。